

昭和館特別企画展 展示構成（案）

「丈夫なからだで病を防げ！
～健康づくりと感染症予防～」

会期：令和3年3月13日（土）～5月9日（日）

会場：昭和館3階研修室

後援：千代田区・千代田区教育委員会

展示点数：118点

内訳：

実物資料 94点

写真 24点

ごあいさつ

健康を維持し、免疫力を高め、丈夫なからだをつくることは、充実した生活を営むための根幹ともいえます。人が「健康」を得るための取り組みは、時代の変容によってその目的も変わっていきます。この企画展では、昭和における「健康」「からだづくり」をテーマとして取り上げ、病気と快復、運動とからだづくり、食生活と栄養、厚生事業等に関わる資料を紹介します。

現在、新型コロナウイルス感染症への対策や外出自粛中の体調維持のため、「健康」への関心が高まっています。国民の関心に呼応したテーマの企画展として、現代への視座を示すことができれば幸いです。

・戦時体制と健康政策

- (1) 厚生省の誕生
- (2) 国民精神総動員運動と健康増進キャンペーン
- (3) 国民体力の向上

・健康を求めて～運動・栄養・生活の工夫～

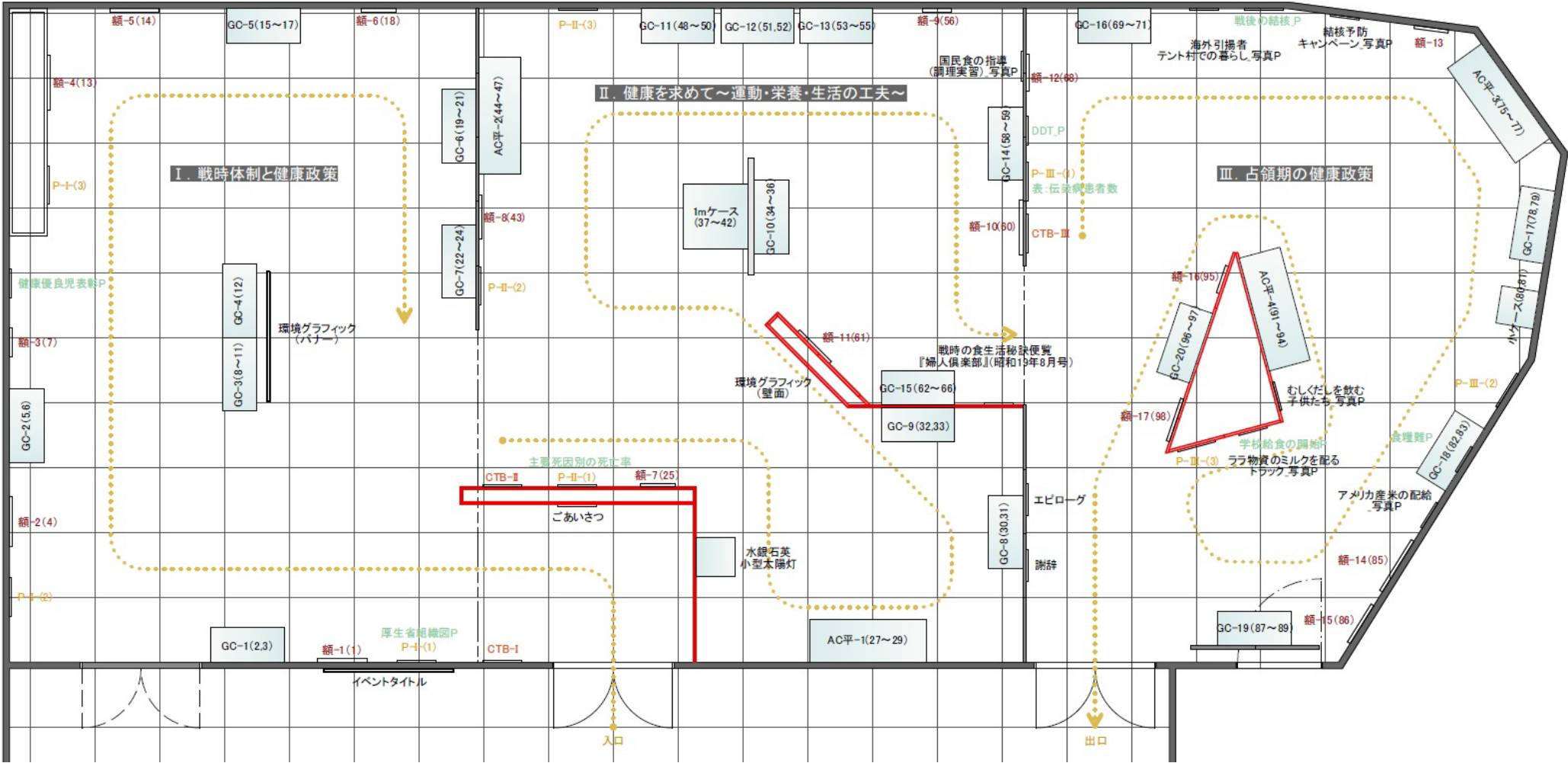
- (1) 「国民病」結核の蔓延
- (2) ラジオ体操の普及
- (3) 食糧事情と栄養事情

・占領期の健康政策

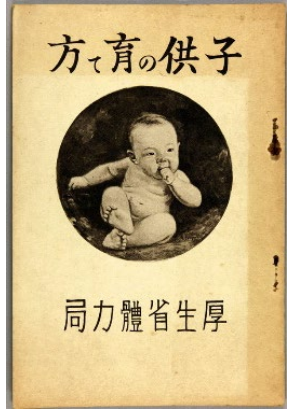
- (1) 公衆衛生
- (2) 深刻な食糧難と栄養改善運動
- (3) 子どもたちの健康

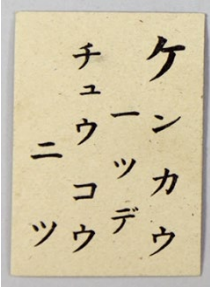
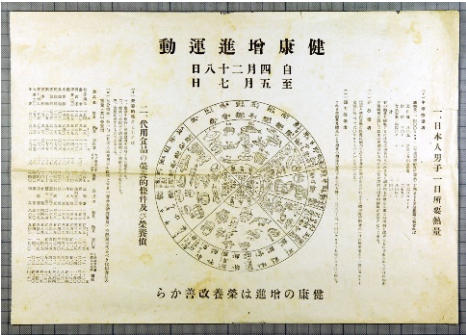
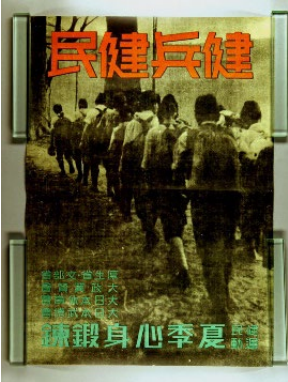
エビローグ

昭和館特別企画展「丈夫なからだで病を防げ！～健康づくりと感染症予防～」
会場平面図



・戦時体制と健康政策 昭和恐慌による農村の疲弊・困窮が影響し、国民の体位低下や結核罹患者が著しく増加しました。これらの問題を行政面で解決することを目的として、昭和 13 年(1938)1 月に厚生省が創設されました。創設当時の厚生省は、体力局、衛生局、予防局、社会局、労働局ならびに臨時軍事援護部の5局1部からなり、国民体力の増進向上に重点を置いた保健・衛生行政を担う省庁として位置づけられました。 日中戦争の長期化にともない戦時体制が強化されると、厚生省は国民体力の向上を重要施策として掲げます。国民精神総動員運動の一環として、「官民一体」となって健康増進を呼びかける運動が展開されました。昭和 15 年には、未成年者の体力向上と結核予防を目標とした国民体力法が制定され、満 17 歳以上満 19 歳以下の男子(昭和 17 年以降は満 25 歳以下の男子)を対象に毎年体力検査と結核検診が行われました。身体鍛錬、健康増進運動などを推進し、「強い兵隊」をつくるためのからだづくりが国を挙げた施策として進められました。	 (バナーで使用) ノビヨ ワレラハ ミクニノ タカラ													
(1)厚生省の誕生 厚生省は昭和 13 年(1938)に「国民体力の向上および国民の福祉増進」をはかることを目的として創設されました。設立の背景には、結核患者と筋骨薄弱者の増加が影響しています。とくに結核死亡率の増加は深刻な問題であり、兵役による集団生活が起因となり、結核を発病する人たちが増加しました。このような状況を改善するため、陸軍軍医総監の小泉親彦は国民の体力向上と衛生行政を司る官庁の創設を要望し、昭和 12 年に「衛生省」構想を提唱します。しかし、当時の内閣総理大臣・近衛文麿は体力向上だけでなく、社会福祉や労働問題にも深く関わる官庁にすべきと考え、昭和 12 年 12 月 3 日に新省「保健社会省」の設置を枢密院に上奏をおこないました。枢密顧問官・南弘は中国の古典『書経』にある「正徳利用、厚生惟和」(徳を正しくして用を利し、生を厚くしてこれとす)の一節から引用した「厚生省」の名称を提案し、その名称が採用されました。	厚生省の機構 <table><tr><td>体力局</td><td>体力向上の企画に関する事項、体力向上の施設に関する事項、体力調査に関する事項、体育運動に関する事項</td></tr><tr><td>衛生局</td><td>衣食住の衛生に関する事項、衛生指示に関する事項、医事及薬事に関する事項、その他国民保健に関する事項に関して他の主管に属せざるもの</td></tr><tr><td>予防局</td><td>伝染病、地方病その他の疾病の予防に関する事項、検疫に関する事項、精神病に関する事項、民族衛生に関する事項</td></tr><tr><td>社会局</td><td>社会福祉施設に関する事項、救護及び救援に関する事項、軍事扶助に関する事項、母子及児童の保護に関する事項、その他社会事業に関する事項、職業の紹介その他労務の需給に関する事項</td></tr><tr><td>労働局</td><td>労働条件に関する事項、工場及び鉱山に於ける労働衛生に関する事項、国際労働事務に関する統轄事項、その他の労働に関する事項</td></tr><tr><td>臨時軍事援護部</td><td>軍事扶助法の施行に関する事項、傷兵院法の施行に関する事項、傷痍軍人の療養に関する事項、軍需労務の需給調整その他職業紹介に関する事項</td></tr></table>	体力局	体力向上の企画に関する事項、体力向上の施設に関する事項、体力調査に関する事項、体育運動に関する事項	衛生局	衣食住の衛生に関する事項、衛生指示に関する事項、医事及薬事に関する事項、その他国民保健に関する事項に関して他の主管に属せざるもの	予防局	伝染病、地方病その他の疾病の予防に関する事項、検疫に関する事項、精神病に関する事項、民族衛生に関する事項	社会局	社会福祉施設に関する事項、救護及び救援に関する事項、軍事扶助に関する事項、母子及児童の保護に関する事項、その他社会事業に関する事項、職業の紹介その他労務の需給に関する事項	労働局	労働条件に関する事項、工場及び鉱山に於ける労働衛生に関する事項、国際労働事務に関する統轄事項、その他の労働に関する事項	臨時軍事援護部	軍事扶助法の施行に関する事項、傷兵院法の施行に関する事項、傷痍軍人の療養に関する事項、軍需労務の需給調整その他職業紹介に関する事項	参考文献:『厚生省二十年史』昭和 35 年(1960)
体力局	体力向上の企画に関する事項、体力向上の施設に関する事項、体力調査に関する事項、体育運動に関する事項													
衛生局	衣食住の衛生に関する事項、衛生指示に関する事項、医事及薬事に関する事項、その他国民保健に関する事項に関して他の主管に属せざるもの													
予防局	伝染病、地方病その他の疾病の予防に関する事項、検疫に関する事項、精神病に関する事項、民族衛生に関する事項													
社会局	社会福祉施設に関する事項、救護及び救援に関する事項、軍事扶助に関する事項、母子及児童の保護に関する事項、その他社会事業に関する事項、職業の紹介その他労務の需給に関する事項													
労働局	労働条件に関する事項、工場及び鉱山に於ける労働衛生に関する事項、国際労働事務に関する統轄事項、その他の労働に関する事項													
臨時軍事援護部	軍事扶助法の施行に関する事項、傷兵院法の施行に関する事項、傷痍軍人の療養に関する事項、軍需労務の需給調整その他職業紹介に関する事項													

		 	
厚生省の誕生 昭和 13 年(1938)1 月 毎日新聞社提供	「厚生省とは」 見開き 4 ページで各局の業務を紹介している。 『写真週報』創刊号 昭和 13 年(1938)2 月 16 日	(左) ポスター「強く育てよ御国の為に」 (右) 『子供の育て方』 厚生省体力局が乳幼児の健康促進を図るために製作したもの。全体の 2 割を占める乳児の死者数を減らすため、栄養素や発育方法などの教化をおこなった。 昭和 14 年(1939)	

(2) 国民精神総動員運動と健康増進キャンペーン 昭和 12 年(1937)に国民精神総動員運動が始まると、国民の健康は国の資源であるとし、体力管理も強化されるようになりました。健康増進によって銃後の国防を充実させることを目的として、政府主導で様々な健康増進キャンペーンが実施されました。 昭和 13 年: 国民精神総動員健康週間(衛生知識の向上と保健生活の実践、伝染病の予防) 昭和 14 年: 健康週間(栄養改善、母性乳幼児の体力向上、結核の予防撲滅) 国民心身鍛錬運動(体力錬成) 令旨奉戴結核予防国民運動(結核予防生活の啓蒙・実践) 昭和 15 年: 健康増進運動(母性乳幼児の体力向上、結核の予防撲滅) 国民心身鍛錬運動 昭和 15 年に結核予防国民運動は結核予防撲滅運動として独立し、昭和 17 年には健康増進運動等が健民運動として統合されました。		  (パネルでアイキャッチとして使用) ケンカウツデ チュウコウニツ	
 ポスター「健康週間」 健康週間は、国民の健康増進と体位向上を図るために行われた教化運動の一つ。期間中はラジオ等でも健康生活に関わる番組が連日放送された。 昭和 13 年(1938)5 月	 健康週間実践事項届出用紙 健康週間の実践事項の範例が 7 つ(清潔、日光消毒、栄養食、心身ノ鍛錬、早起早寝、食餌衛生、健康相談)あげられており、各戸で 1 日 1 項実践して記入するように指示されている。 昭和 13 年(1938)頃	 健康増進運動 兵庫県が実施した健康増進運動の掲示物。「健康の増進は栄養改善から」と書かれ、代用食品の栄養価等が書かれている。 戦中	 ポスター「健兵健民」 昭和 17 年 7 月 21 日から 8 月 20 日まで実施した健民運動のポスター。盛夏を利用し、全国民に対し積極的に心身鍛錬を呼びかけた。体操や歩行登山の他、集団勤労作業等に重点がおかれた。 昭和 17 年(1942)8 月

● 全日本健康優良児童表彰 全国小学校児童の健康調査をおこなうため、朝日新聞社は昭和 5 年(1930)に健康優良児表彰事業を始めました。小学校 5 年生の児童が対象とされ、全国の小学校が男女各 1 名を選出する学校審査のあと、地方審査、中央審査を経て日本一の健康優良児が選ばれました。検査項目は、発育(身長、体重、胸囲)、運動能力(50 メートル走、走り幅跳び、ボール投げ)等で、日本一に選ばれた児童はもちろん、地方審査で選ばれた児童も地方の紙面で逐一報道されました。国民の体力管理が強化されていく中で、将来の兵力としての児童の健康について関心が高まり、一新聞社の事業が、国家的なイベントとして社会に認知されていきました。	 表彰状 右者全日本健康優良児童表彰会 規定により其校児童中ノ健康優良 ナル者トテ校長ヨリ推薦セラル 仍テ之ヲ表彰ス 昭和十五年六月二十五日 主 催 朝日新聞社 後援 文 部 省	 メダル(全日本健康優良児童表彰会) 「日本一の桃太郎を探す」とうキャッチフレーズで始まったため、メダルも桃太郎の横顔がレリーフとなっている。 昭和 16 年(1941)6 月	
 「“健康”で築け大東亜」表彰された今年の健康優良児 日本一の男児と女児を紹介している。 『週刊少国民』第 1 巻第 7 号 昭和 17 年(1942)6 月 28 日	 絵(身体検査) 国民学校 4 年生の女児が描いた身体検査の様子。手に検査表を持っている。身長・体重・胸囲・座高の他、脊柱、胸郭なども検査された。 昭和 17 年(1942)	  「健康漫画カルタ」 東京市厚生局児童課と全日本小物玩具卸商連合会との共同主催で製作された。読み札は 8000 を超える応募の中から、北原白秋らが審査し、48 句が選ばれた。健康や病気予防について、子どもにもわかりやすく書かれている。 東京市厚生局児童課選定・絵：島田啓三 昭和 16 年(1941)10 月	

(3)国民体力の向上

体力向上を図るため、昭和 14 年(1939)から体力章検定が実施されました。対象は数え年 15～25 歳の男子(昭和 17 年以降女子を対象とした検定も実施)で、走・跳・投・運搬・懸垂の 5 種目が審査されました。

また、成人男性の体力低下防止と結核予防の徹底を目標として、昭和 15 年に公布された国民体力法は、満 17 歳以上満 19 歳以下の男子(昭和 16 年以降は対象年齢が拡大)に対し、年に 1 回の体力検査と結核検診をおこない、その結果を記載する国民体力手帳を交付するというものでした。筋骨薄弱や軽度の結核などの虚弱者と診断された場合は、健民修練所に入り、最大 2 ヶ月間の合宿形式の生活教練に参加しなければなりませんでした。

国民体力章検定標準

		上級		中級	初級
男	走	100 m疾走	14 秒	15 秒	16 秒
		2000 m走	7 分 30 秒	8 分	9 分
	跳	走幅跳	4m80cm	4m50cm	4m
	投	手榴弾投	45m	40m	35m
	運搬	運搬(50 m)	60kg -15 秒	50kg -15 秒	40kg -15 秒
女	懸垂	懸垂屈臂	12 回	9 回	5 回
	走	1000 m走	4 分 30 秒	5 分	5 分 30 秒
	跳	縄跳	1 分 20 秒	1 分	40 秒
	投	短棒投	24m	20m	16m
	運搬	運搬 16kg-100m (50 m折返)	24 秒	26 秒	29 秒

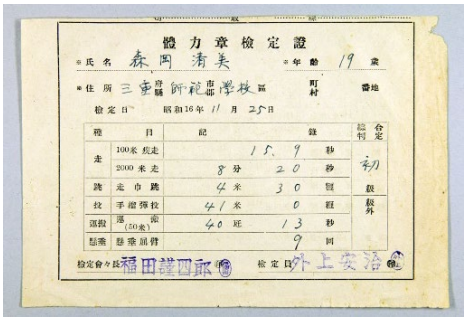


(パネルでアイキャッチとして使用)
ヘイタイサンニモ マケナイ カラダ



ポスター「体力章検定」

男子青少年の基礎体力向上を目指し、昭和 14 年から体力検定制度が実施された。昭和 15 年度からは不合格者にも甲乙丙の等位を設けた。



体力章検定証(初級)

体力章検定は、運動の基本である走・跳・投・運搬・懸垂の 5 種目で行われ、初級は壮丁甲種合格者の運動能力標準程度が求められた。
昭和 17 年には検定種目に水泳が追加された。
昭和 16 年(1941)11 月



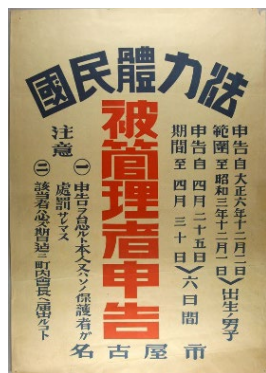
検定徽章(初級)

検定合格者に授与された徽章。徽章の色は、初級が銅色、中級が銀色、上級が金色と定められた。
昭和 14 年(1939)

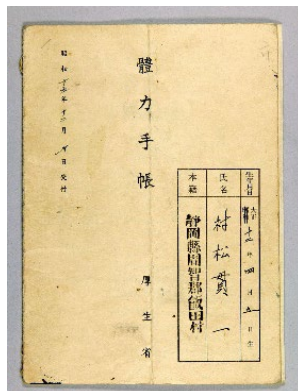


「体力章検定皆さん合格できますか？」

『写真週報』第 91 号
昭和 14 年(1939)11 月 15 日



ポスター「国民体力法 被管理者申告」
体力検査の対象者に対し、申告を呼びかけるポスター。申告を怠ると本人又は保護者が処罰されることが書かれている。



体力手帳
国民体力法の制定に合わせて厚生省が発行したもの。体力検査の成績が記入され、徴兵検査を受ける際に提示することが義務づけられた。

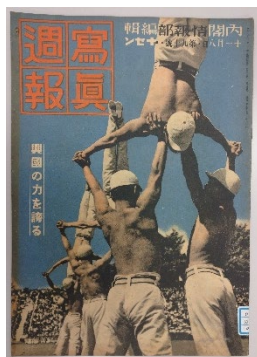
昭和 15 年(1940)

● 国をあげての体育大会

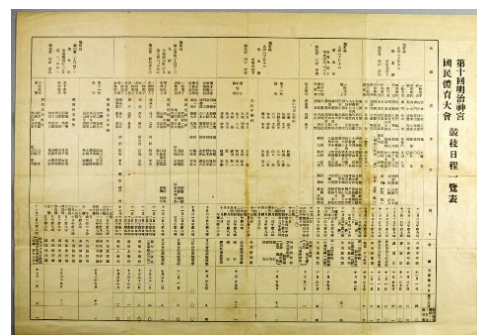


第十回明治神宮国民体育大会選手票
明治神宮体育会主催として続けられてきた神宮体育大会は、第 10 回から明治神宮国民体育大会として、厚生省主催で実施されることとなった。国民の基礎的体力の錬成をはかることが目的とされ、挙国の体育大会として重要視された。

昭和 14 年(1939)

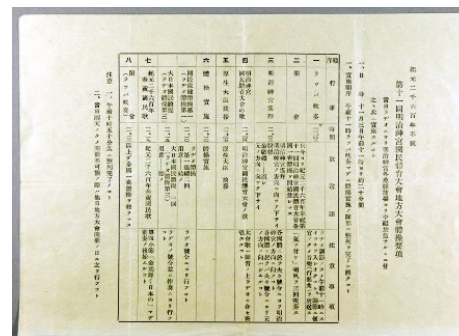


「興国の力を誇る 第十回明治神宮国民体育大会」
大会の様子を数ページに渡って紹介している。
『写真週報』第 90 号
昭和 14 年(1939)11 月 15 日



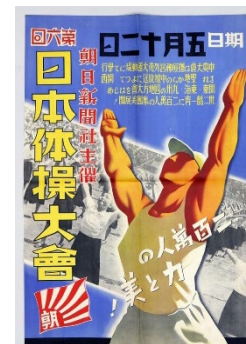
第十回明治神宮国民体育大会競技日程一覧表
9 月に夏季大会(水上競技、ヨット)、10 月から 11 月にかけて秋季大会(剣道、陸上競技等 20 種目)、2 月に冬季大会(スケート、スキー)が行われた。第 10 回から国防競技(行軍、手榴弾投擲突撃、土嚢運搬等)が加わった。

昭和 14 年(1939)



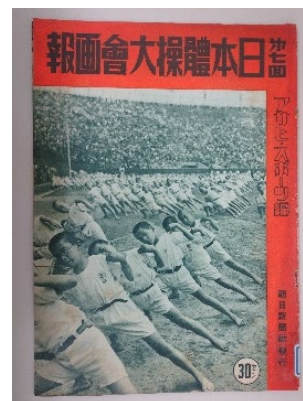
第十一回明治神宮国民体育大会地方大会体操要項

昭和 15 年(1940)11 月 3 日



ポスター「第六回日本体操大会」
日本体操大会は、国民の体位向上、国民意識の昂揚を図るため、昭和 10 年に開始された。大会の内容は、集団体操(マスゲーム)を中心に、器械体操、武道、演奏行進等、多様な演技で構成された。

昭和 16 年(1941)



参加賞(第七回日本体操大会)
昭和16年(1941)5月10日

『アサヒ・スポーツ 第七回日本体操大会画報』(第
19 巻第 10 号臨時増刊)
昭和 16 年(1941)5 月

健康を求めて～運動・栄養・生活の工夫～

戦時色が濃くなるにつれ、国は配給制度等による統制経済で食糧や生活物資を充足させようとしたが、物資不足は解消できませんでした。食糧が行き渡らないことによる国民の栄養不足は深刻化し、体力だけでなく免疫力の低下が問題となります。結核罹患による死亡率は欧米諸国の2～3倍という高さにのぼり、日本の労働力および兵員確保の基盤を揺るがしました。

一方で、日中戦争を契機にラジオが普及すると、ラジオ体操が国民生活に浸透しました。欧米列強に比べて体格が小さい日本人の筋骨強化と体力向上を図るうえで、ラジオ体操の普及には大きな期待が寄せられました。運動による筋骨強化だけでなく、集団で同じ動作をおこなう体操は、国民精神を養う意味でも効果的だと考えられました。

しかし戦争の長期化にともない、日本人を取り巻く栄養事情は悪化の一途をたどります。米不足により玄米、芋類などを主食にすることが奨励され、国民は食糧不足のなかで調理・食事のしかたを工夫する必要がありました。

(1)「国民病」結核の蔓延

結核は、結核菌が体内(主に肺)に入り炎症を起こす伝染病で、患者や死亡者が多く、「国民病」として恐れられていました。昭和9年(1934)には結核による死亡者数は13万人を超え、翌年には死因第1位となりました。

昭和14年までは死亡者数の男女に大きな差はありませんでしたが、昭和15年以降は男性の死亡者が女性をはるかに上回りました。兵役や工場への出稼ぎによる集団生活で感染の機会が多くなったことが原因でした。当時は完治する薬もなかったため、結核にかからない体を作ることが重要でした。そのため、体操によって体力をつけ、免疫力をあげるために栄養のある食べ物をとることが推奨されました。

また、昭和16年以降は国民学校を卒業し軍需工場等の重要事業場へ就職を希望する児童を対象に、結核予防のBCG接種が開始されました。

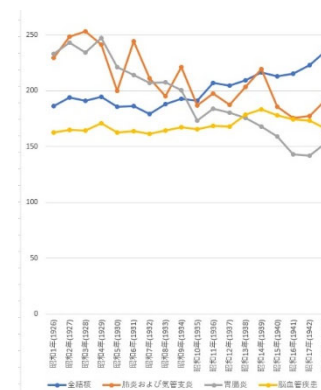


(コーナーパーナードで使用)
結核の予防

昭和11年(1936)頃
熊谷元一撮影



(パネルでアイキャッチとして使用)
マドカラ ムカエル ヨイクウキ
ネマキ オフトン ヒニ アテヨ



主要死因別の死亡率(昭和元～18年)

胃腸炎、肺炎および気管支炎、全結核、脳血管疾患の死亡率。結核は昭和10年から18年の間、昭和14年を除き、死因第1位であった。
『完結昭和国勢総覧』を基に作図



結核療養所でのX線撮影

昭和11年(1936)頃
日本写真家協会(JPS)提供



結核療養所の病床

昭和 11 年頃(1936)
日本写真家協会(JPS)提供



結核療養所の子どもたち

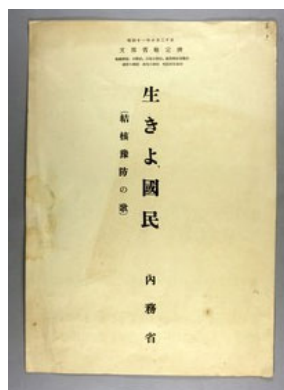
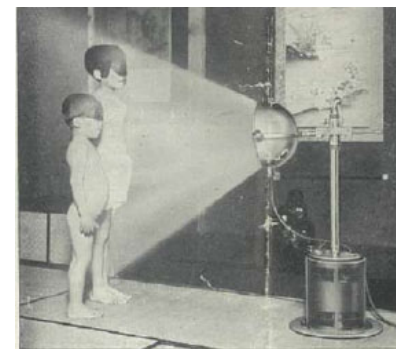
保護めがねをかけて太陽灯を浴びる、日光療法
をおこなっている。東京府立久留米学園
昭和 11 年(1936)
松田正志(JPS)撮影



水銀石英小型太陽灯

家庭用の太陽灯。説明書には、紫外線療法は、肺結核、腸結核、気管支炎等の内科疾患の他、外科、皮膚科、神経性疾患、婦人科、小児科、耳鼻咽喉科等、幅広い疾患に好適応と記されている。

昭和 15 年(1940)
平和祈念展示資料館蔵



楽譜「生きよ、国民(結核予防の歌)」

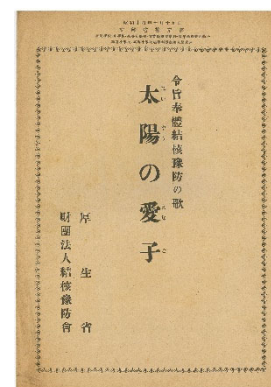
結核予防国民運動の際に製作された結核予防
の歌。
昭和 11 年(1936)10 月 20 日



『健康読本』

結核予防国民運動の際に、結核予防に関する
正しい知識を普及することを目的に製作されたパンフ
レット。

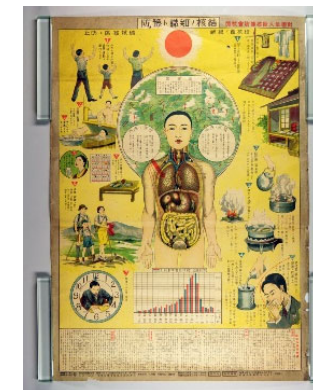
内務省衛生局予防課
昭和 11 年(1936)10 月



楽譜「令旨奉体結核予防の歌 太陽の愛子(まなご)」

昭和 14 年 4 月 28 日、皇后陛下(香淳皇后)
から結核予防に努力するようにという令旨とともに、こ
内帑金 50 万円が下賜され、官民一体となって結
核予防事業がおこなわれた。

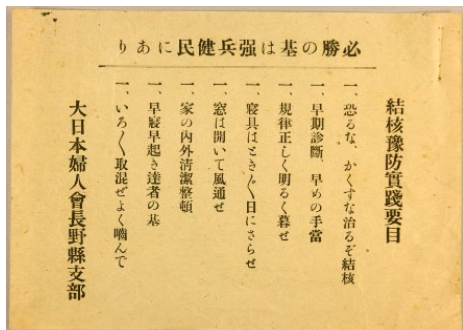
昭和 14 年(1939)11 月



「結核ノ知識ト予防」

結核という病気や、罹患者の生活上の注意点等
を説明する掛図。財団法人結核予防会は、昭和
14 年 4 月 28 日、皇后陛下(香淳皇后)の令旨を
奉戴し、閣議決定によって設立された。

昭和 16 年(1941)12 月 25 日



結核予防実践要目

「必勝の基は強兵健民にあり」というスローガンのもと、早期診断や規則正しい生活等、8つの実践要目が記されている。大日本婦人会は昭和17年2月に愛国婦人会・大日本連合婦人会・大日本国防婦人会の3団体が統合され新設された。

昭和17年～20年(1942～1945)



紙芝居「見えない悪魔 第三・療養篇」

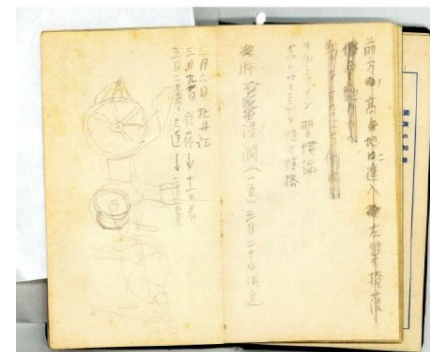
厚生省推薦の結核予防を目的とした教育紙芝居。栄養価の高い食事の重要性や、病人と接した後の消毒等が具体的に描かれている。

昭和17年(1942)

●花森安治と結核

『暮しの手帖』の創刊者であり、編集者、デザイナーとしても知られる花森安治は、軍隊での集団生活によって結核に罹患しています。

昭和12年(1937)に徴兵検査に甲種合格した花森は、翌13年には満洲の部隊に配属されました。しかし、昭和14年2月の身体検査で胸部に異常が見つかり、肺浸潤(肺結核の初期の状態)と診断されます。内地に戻った花森は療養生活を送りますが、病気を理由に除隊となりました。その後は大政翼賛会の宣伝部に入り、広報宣伝や標語ポスター制作など、国策宣伝に従事しました。戦争に翻弄された花森でしたが、終戦を迎えた昭和20年の秋、大橋鎮子と出会い、『スタイルブック』『暮しの手帖』を世に生み出しました。



花森安治の従軍手帖

「肺浸潤三月二十日決定」と記載されている。

昭和14年(1939)

世田谷美術館蔵



堀辰雄「風立ちぬ」

堀辰雄の代表作。自ら結核を病みつつ、より病状の重い婚約者に付添って信州のサナトリウムに入った数か月の経験をふまえて書かれた作品。

『改造』第18巻第12号

昭和11年(1936)12月

●家庭で使用されていた医療器具等



「家庭療法と看護法」

『主婦之友』第21巻第5号附録

昭和12年(1937)5月



体温計



クマイイ体温計
「体温計見えぬ病を目に見せる」と書かれた体温計の広告。



吸い飲み
寝た状態でも水を飲めるようにした容器。



吸入器
家庭用の吸入器。主に流行性感冒の予防や治療に使用された。アルコールランプで発生させた蒸気圧で薬液を霧状にして、咽喉に吸入する。



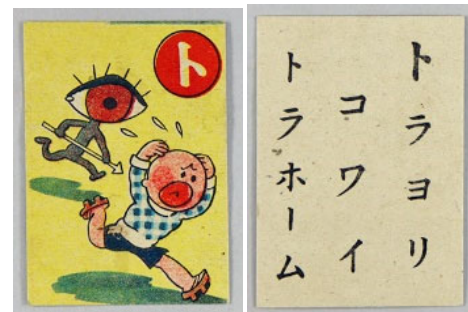
吸入器を使う幼児
昭和2年(1927)
石川光陽撮影



マスク
戦前



洗眼器
トラホーム(眼の伝染病)の予防になると説明書に書かれている。



(パネルでアイキャッチとして使用)
トラヨリ コワイ トラホーム



健康ローラー
マッサージ器。チラシには「国民の体位向上に」「作れお役に立つ身体」といった言葉が書かれている。

戦中

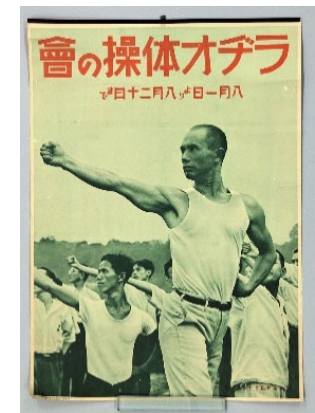
(2)ラジオ体操の普及

昭和 3 年(1928)に当時の逓信省簡易保険局が、被保険者の健康増進と保険の普及を目的として、国民保健体操を創始しました。文部省や日本放送協会と協力のうえ、昭和天皇が即位する際の記念事業として、伴奏と号令つきでNHKラジオより放送されたこの体操は「ラジオ体操」として親しまれ、欧米諸国と比べて小さかった日本人の体格を補強するものとして普及活動が行われました。昭和 7 年以降には全国でラジオ体操の会と称して、夏季に集団でラジオ体操をする様子が各地でみられるようになりました。

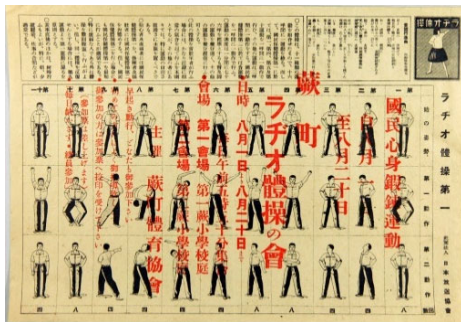
日中戦争を契機にラジオが普及すると、ラジオ体操は国民的な体操となりました。集団で同じ動作を行うことによって身体の健康のみならず国民精神を養うことができると考えられるようになり、昭和 12 年から実施された国民心身鍛錬運動のなかでもラジオ体操の実施が政府によって奨励されました。



(パネルでアイキャッチとして使用)
ラジオニ アハセテ 一、二、三



ポスター「ラジオ体操の会」
ラジオ体操の番組は年中無休で毎朝 2 回、NHK ラジオで放送され、小学校や寺社の境内、職場などを会場にして体操が行われた。
昭和 12 年(1937)頃



「ラジオ体操第一」

ラジオ体操第一の動作を図示したもの。動作が現在とは異なっている。動作のテンポや注意点も書かれている。

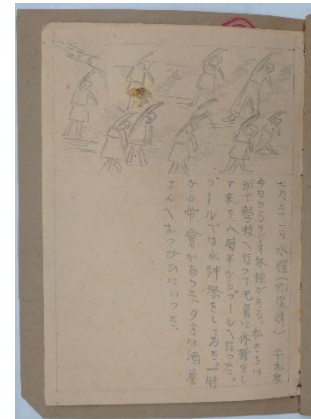
昭和 15 年(1940)



ラジオ体操の会参加票

参加票は現在使用されるスタンプ台紙とほとんど変わらない。「ラジオ体操の歌」の歌詞は公募によるもので、現在の歌詞とは異なっている。

昭和 13 年(1938)



夏休日記

中野区立向台国民学校 5 年生の女兒の絵日記。学校に行ってラジオ体操をしたことが書かれている。

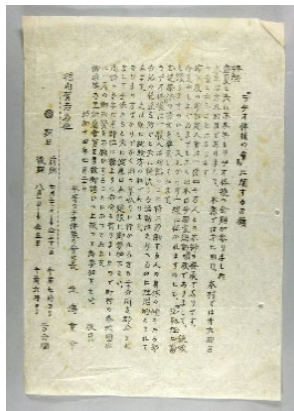
昭和 18 年(1943)7 月 21 日



楽譜「国民保健体操(ラジオ体操)」

ラジオ体操第一の伴奏用の楽譜。現在とは異なっている。リズムにあわせて体操できるように工夫された伴奏であることが記されている。

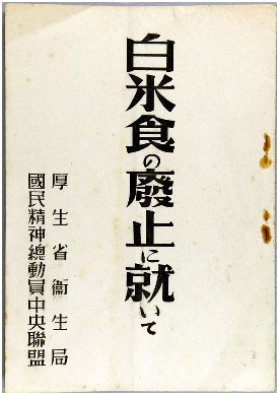
昭和館特別企画展「丈夫なからだで病を防げ！～健康づくりと感染症予防～」
 .健康を求めて～運動・栄養・生活の工夫～ (2)ラジオ体操の普及



『ラジオ体操の会』に関するお願い
 ラジオ体操の会への参加を呼びかけた文書。「今年
 は本部並びに県よりの命令もありましたので」と書
 かれている。
 昭和 14 年(1939)7 月 20 日



大阪高島屋厚生体育大会 ラジオ体操
 昭和 16 年(1941)11 月 10 日

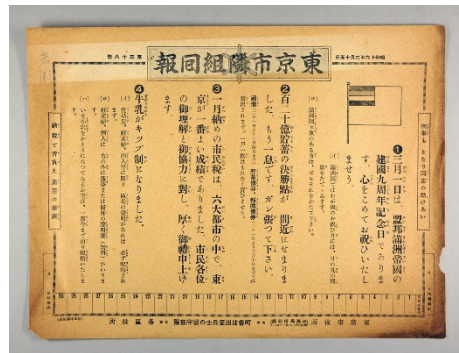
(3)食糧事情と栄養事情 日中戦争の長期化にともなう米不足を受け、政府は昭和 14 年(1939)11 月に米穀搗精等制限令を公布しました。精米を七分づきに制限することで量を確保するなど、積極的な節米が奨励されました。さらには大根や芋を混ぜて炊く混食、主食をトウモロコシや芋におきかえる代用食が普及します。昭和 17 年には「玄米食の普及に関する件」が閣議決定され、主食は玄米でしか配給されなくなりました。しかし玄米食はビタミン B1 などの栄養が豊富ではあるものの、消化・吸収がよくないため、賛否両論がありました。 政府が食糧統制を強化しても、食糧事情は向上せず、国民の栄養失調症が見受けられるようになり、栄養不足による子どもの発育不良が顕著になりました。深刻な食糧難による栄養事情の改善が見られないまま、日本は終戦を迎えました。	 (パネルでアイキャッチとして使用) ワガママ イフナ タベモノニ	 ポスター「食糧の確保は節米から」 米飯のみでは栄養面でもよくないと記し、「銃後の国民が米のゴハンで満腹するなどバチが当る」と精神面からも節米をうたっている。 昭和 12 年頃から昭和 20 年	
 『白米食の廃止に就いて』 厚生省衛生局と国民精神総動員中央連盟が発行した白米食の廃止を訴えるパンフレット。白米食が引き起こす弊害を挙げ、栄養面でも節米の観点からも白米より搗精していない玄米や胚芽米が優れていると説いている。 昭和 13 年(1938)5 月	 栄養献立表 (米八七分搗米トス) 米沢市役所が発行した戦時下の献立を栄養素や熱量、価格まで示した献立表。田畑はもちろん、家の片隅や空き地に大豆やキビ、アワ等を植えて食物の自給自足を図ること、1 日 1 回はかゆを食べること等が書かれている。 昭和 16 年(1941)3 月	 混食飯 七分づき米に大豆かすを混合した配給米に、さつまいもを混ぜて炊き増えさせたもの。その他に挽き割りとうもろこし、こうりゃん、大豆、じゃがいも等も混入された。 復元 昭和 19 年(1944)頃	 『勝つための食生活案内』 無駄を活かして不足を埋めること、栄養知識をもつことの重要性が呼びかけられている他、野草や、従来家畜や鶏の餌として用いていた雑穀や、肥料にしていた海藻などを粉にして活用する方法等が紹介されている。 昭和 17 年(1942)2 月



妊産婦加配通帳

現在の「母子健康手帳」の前身として昭和17年(1942)から妊娠3ヶ月以上の者へ「妊産婦手帳」の交付が開始され、妊娠時の診察を励行するとともに、必需物資及び食糧の特配を行った。

昭和18年(1943)



東京市隣組回報 第三十八号

牛乳が切符制になることが記されている。乳幼児、妊産婦、病人等に限り配給を受けることができたが、産婆または医師の証明書が必要とされた。

昭和16年(1941)2月15日



家庭用米穀通帳

米の配給を受け取るための通帳。米は配給所から世帯分の割当量をまとめて一定日に受け取り、配給所員は通帳に配給量、金額等を記入した上で捺印した。

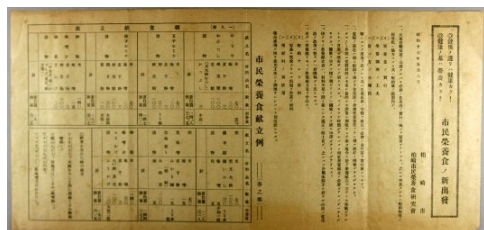
昭和19年(1944)



国民食の指導(調理実習)

昭和15年11月、食糧報国聯盟が男女各年齢ごとに国民食栄養基準を定めた。国民食の理念の周知、具体的な献立指導のため大政翼賛会生活指導部で講習が開かれた。

昭和15年(1940)



市民栄養食/新出発

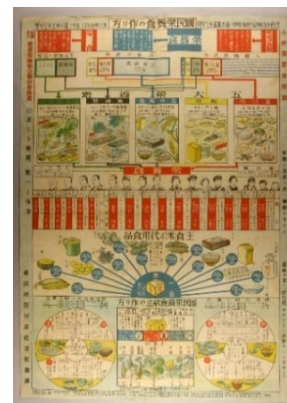
配給される食糧で作れる栄養献立の例を示したものの。主食は粥おじやが多い。

柏崎市・柏崎市民栄養食研究会発行
昭和17年(1942)5月8日



国策栄養食製器

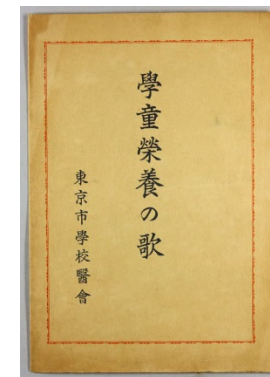
代用食作りに使用された家庭用の製麺器。こねた材料を中に入れ、手で押し出すというもの。



ポスター「国民栄養食の作り方」

栄養素の解説とあわせ、主食と代用食品をあわせた国民栄養食の作り方が紹介されている。

愛媛県警察部健康保険課発行
昭和16年(1941)12月25日



楽譜「学童栄養の歌」

東京市学校医会が製作した歌。歌詞に「御飯は滋養な七分搗」とある。

杉田武義案 / 佐藤義美作歌 / 中山晋平作曲



ポスター「胃腸栄養わかもと」
わかもとはビタミンBと消化酵素が配合された消化・整腸・栄養補給剤。体力向上と疲労回復をうたった、工場の福利厚生用の「勤労用わかもと二号」もあった。
昭和 14 年(1939)



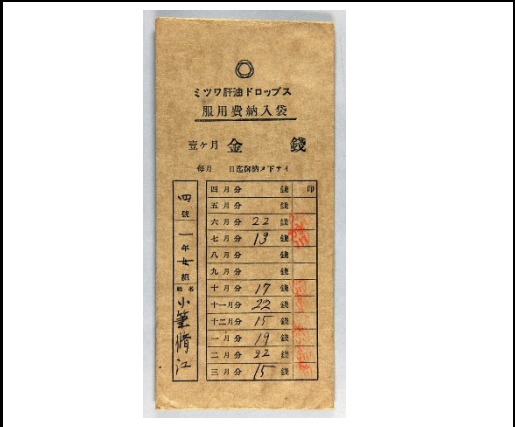
わかもと
学童疎開先に持参されることも多く、空腹に耐えかねた疎開学童の中には、持参した薬を食べる者もいた。
戦中



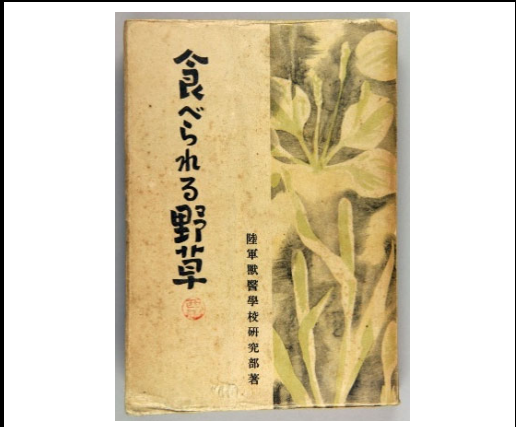
ポスター「虚弱な児童にハリバが良い」
ハリバは肝油剤で、1日1粒で必要な量が摂取できるとされた。
戦中



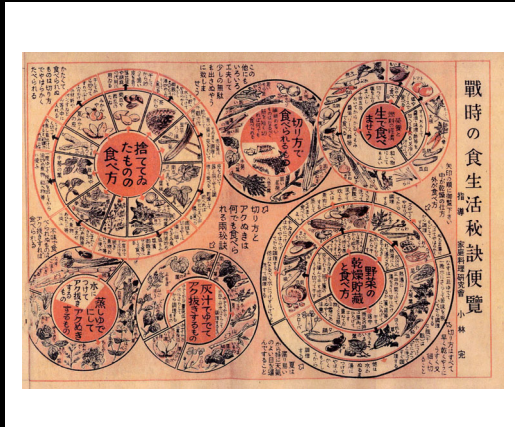
チラシ(カワイ肝油ドロップ)
サメやエイなどの魚の肝臓に含まれている脂肪油をドロップにしたもの。ビタミンが多く含まれており、栄養補助食品として学校で配られることもあった。



ミツワ肝油ドロップス服用費納入袋
昭和 12 年度



『食べられる野草』
オオバコ、ノビル、タンポポなどの他、毒草を除けばほとんどの草花が食用にできると書かれており、灰汁抜き、調理法、保存法も紹介されている。
昭和 18 年(1943)



戦時の食生活秘訣便覧
野菜を乾燥させて貯蔵する方法や、茶殻やとうもろこしの芯等、捨てていたものをいかに食べるかといった方法が紹介されている。
『婦人倶楽部』昭和 19 年(1944)8 月号

・ 占領期の健康政策

終戦後、戦時体制下の栄養水準低下・医薬品不足の状況に加え、海外からの引揚げ・復員によって新たな病原菌が持ち込まれたこともあり、発疹チフスや痘瘡等の急性伝染病患者が急増しました。このため、港での検疫や DDT による消毒の実施、集団予防接種など強力な感染症対策がおこなわれました。

また、当時の食糧事情は極度に悪く、食糧支援を受けるための基礎資料としてGHQ（連合軍最高司令官総司令部）は昭和 20 年（1945）11 月に国民の栄養調査の実施を指令しました。さらには厚生省の主導で、栄養改善運動が始まり、肉や卵や乳製品、油脂の摂取量が多いアメリカの食生活をモデルとした栄養改善が示されました。

昭和 21 年からラウ物資などの救援物資による学校給食が開始され、未来を担う子どもたちの栄養改善が図られました。脱脂粉乳による「ミルク給食」が日本国内に普及し、牛乳は子どもたちのからだづくりには欠かせない食物として認識されました。健康優良児表彰が再開され、学校や地域ぐるみによる健康・からだづくりが実践されました。



甲板でDDTによる消毒作業・神奈川県横須賀市
日本上陸準備の一環として帰還者の身の回り品をDDT消毒する。

昭和 22 年(1947)5 月
米国国立公文書館提供

(1) 公衆衛生

終戦直後、日本の衛生状態は極めて悪く、戦中からの栄養不足によって国民の体力も低下していたため、急性伝染病の防疫が重要な課題となりました。海外からの引揚げ者・復員者によって運ばれた病原菌により、昭和 21 年には発疹チフスや痘瘡の感染者が爆発的に増加したため、伝染病の蔓延を防ぐため、船舶や検疫所では DDT による消毒がおこなわれました。

昭和 23 年に予防接種法が制定されると、ジフテリア、百日せき、急性灰白髄炎、麻疹、風しん、日本脳炎、破傷風、結核、Hib 感染症、肺炎球菌感染症(小児がかかるものに限る。)、ヒトパピローマウイルス感染症、インフルエンザの 12 種類の伝染病を対象とした予防接種が実施されるようになりました。



戦後増加した法定伝染病の患者数
赤痢、痘瘡、発疹チフス

『完結昭和国勢総覧』を基に作図



チフス撲滅キャンペーン・東京駅
3 月 17 日から 10 日間、午後 2 時から 6 時までの間、東京駅他、都内の 8 つの駅に防疫班がおかれ、予防注射が行われた。都内通勤者は乗降時に定期券と一緒に「注射済証」を調べられ、予防注射が済んでいない者は乗車を断られる場合もあった。

昭和 22 年(1947)3 月 28 日
米国国立公文書館提供

● DDT

DDTは白い粉末状の強力な殺虫剤で、伝染病を運ぶ虫を殺すため、港での検疫をはじめ様々な場所で使用されました。

終戦直後、天然痘、チフスなどの伝染病がまたたくまに蔓延しました。なかでも発疹チフスは、衣服や髪についているシラミが媒介し、爆発的に患者数が増えたため、GHQ は昭和 21 年(1946)3 月に DDT 大量散布計画を発表しました。

どぶや便所など非衛生的な場所や、街頭や駅、学校などの公共の場所では人間にも強制的に振りかけられました。



空からの消毒・東京

アメリカの輸送機から DDT が大量に散布されている。後方は国会議事堂。

昭和 21 年(1946)7 月 22 日
米国国立公文書館



DDT 散布機

横浜援護所(現・横浜検疫所)で使用されていたもの。

昭和 20 年(1945)



予防接種証明書

引揚者に対しては各地の引揚援護局の検疫所を通じてコレラなどの予防接種や消毒など厳しい検疫が行われた。

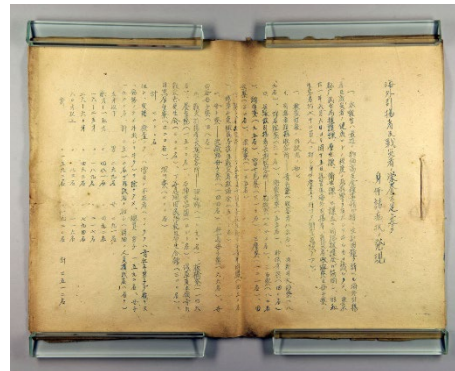
昭和 23 年(1948)5 月 30 日



海外引揚者テント村での暮らし・上野公園

戦後しばらくは、バラック・壕舎等で生活する人も多く、それらの住居の多くは便所や排水溝、水道などの設備が不十分で、いつ伝染病が発生してもおかしくない衛生状態であった。

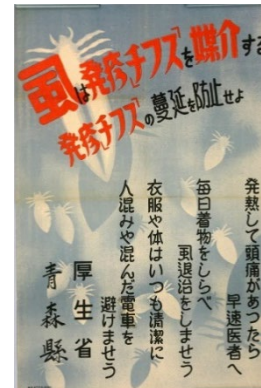
昭和 22 年(1947)
師岡宏次撮影



海外引揚者及戦災者ノ栄養不足ニ基ク身体諸病状ノ発現

東京都民生局が引揚者と戦災者の栄養不足調査のために、収容施設や母子寮に暮らす約 7200 人に対して実施した身体検査の報告書。多くの者に体重の減少、貧血や口角炎等の栄養失調症状群が見られたことが記されている。

昭和 21 年(1946)



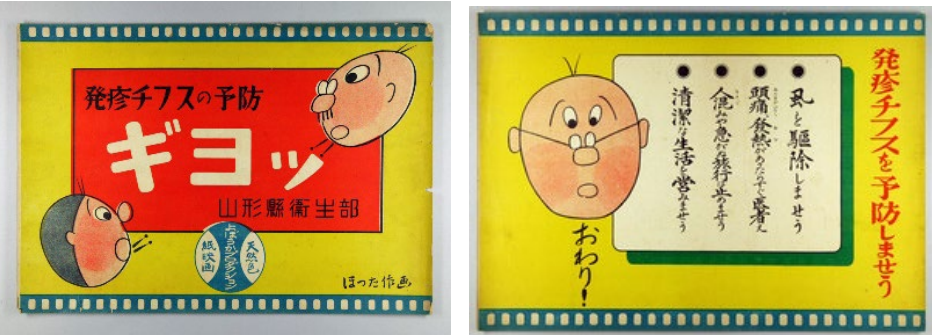
ポスター「虱は発疹「チフス」を媒介する発疹「チフス」の蔓延を防止せよ」



「蚤助の一生」

ノミの生態を説明する中で、ペスト菌を媒介すること、ナフタリンや DDT が大敵であることを説明している。

『小学四年生』第 29 巻第 5 号
昭和 25 年(1950)8 月

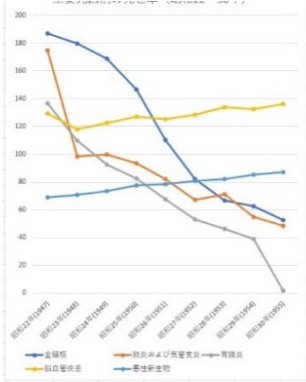


「発疹チフスの予防 ギョッ」
発疹チフス予防のための啓蒙紙芝居。ただの風邪と思わずに、頭痛や発熱の際にはすぐに医者に見せること、しらみの駆除、人混みや不急の旅行はやめることの重要性が書かれている。
昭和 25 年(1950)3 月 31 日



パンフレット「赤痢予防の話」
昭和 28 年(1953)

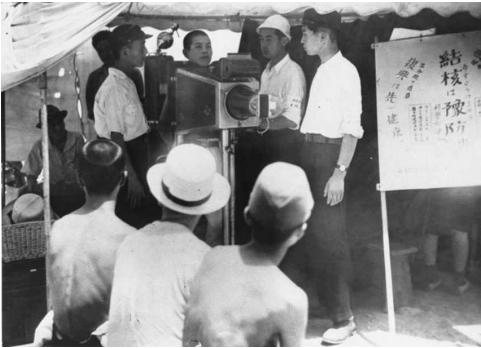
● 戦後の結核
終戦前から増加の一途をたどっていた結核は、戦後、昭和 24 年に治療薬ストレプトマイシンが輸入され、翌 25 年には国産化されて広く普及しました。それによって昭和 26 年には結核の死亡者が 10 万人を下回り、死因 2 位に下がりました。



グラフ 死因別の死亡率 (昭和 22～30 年)
結核、悪性新生物、脳血管疾患、肺炎及び気管支炎、胃腸炎の死亡率の推移。
昭和 26 年に脳血管疾患が結核を抜いて第 1 位に。
『完結昭和国勢総覧』を基に作図



清瀬村の国立東京療養所
国立東京療養所だけでなく、私立の療養所も多く設置され、「清瀬村」といえば結核療養所の代名詞といわれるほどだった。
昭和 28 年(1953)
毎日新聞社提供



結核予防キャンペーン・東京
結核予防会の医師が、東京の街角に X 線写真装置を設置し、通行人の肺を無料で撮影した。看板には「復興は先づ健康」と書かれている。
昭和 21 年(1946)7 月
米国国立公文書館提供

昭和館特別企画展「丈夫なからだで病を防げ！～健康づくりと感染症予防～」
・ 占領期の健康政策 (1) 公衆衛生・伝染病・結核予防対策



ポスター「結核にうつらぬ前に B.C.G」
0 歳から 30 歳までの未接種者を対象とした予防接種 (B.C.G、ツベルクリン) の日程を知らせるポスター。
昭和 23 年 (1948) から 26 年



太宰治『パンドラの匣』(初版本)
昭和 20 年から昭和 21 年にかけて河北新報で連載された太宰治の小説。主人公が親友に宛てた手紙という形式で、終戦直後の結核療養所を舞台に繰り上げられる人間模様が描かれた。



昭和 21 年 (1946) 6 月 河北新報社
日本近代文学館蔵

『パンドラの匣』
主人公「ひばり」は中等学校卒業後、肺炎のため自宅で過ごし、咯血を隠して畑仕事に勤しんでいた。終戦を迎えると家族に症状を告白し、屈伸鍛錬と摩擦による治療を行う一風変わった結核療養所「健康道場」に入所することとなる。道場でひばりは、同室の個性豊かな療養者たちとの交流や「マア坊」と「竹さん」という二人の看護婦との恋愛模様を通じて、人間的な成長をとげていく。
本小説は太宰の読者であり、実際の結核患者だった木村庄助の病床日記がもとになっており、作者の太宰自身も生涯に渡って結核に苦しんだとされている。



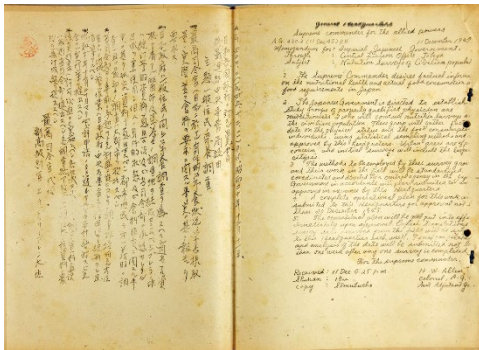
「パンドラの匣」連載第 1 回
「河北新報」
昭和 20 年 (1945) 10 月 22 日



紙芝居「母子草」 No. 5
昭和 27 年頃を舞台にした紙芝居。主人公の千栄子の育ての母は、肺結核と思われる病で亡くなる。戦後になっても結核は不治の病として描かれていた。

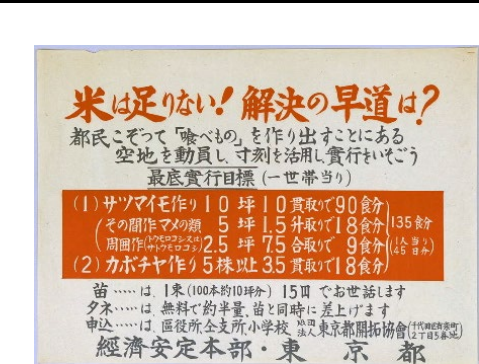


「結核の新しい化学療法」
ストレプトマイシン、パラミサリチール酸、コンテペンが新薬を紹介している。記事の中で、新しい薬を発見することと同時に、いかに安く大量にできるかの研究が必要と書かれており、まだまだ高価なものであったことが伺える。
『主婦之友』第 34 巻第 9 号
昭和 25 年 (1950) 9 月

(2) 深刻な食糧難と栄養改善運動 戦後、戦災による耕地の荒廃や大凶作のため農作物が減り、特に都市部の食糧事情はひっ迫していました。配給も遅配と欠配が続き、飢えた人々は昭和 20 年(1945)に餓死対策国民大会、翌年には食糧メーデーを行い、政府に抗議しました。食糧事情を改善するため、昭和 20 年の国民栄養調査の結果に基づき、昭和 21 年以降、GHQ の備蓄食糧の放ちやララ やユニセフの食糧寄贈によって国際的な食糧援助が行われました。 昭和 24 年には「皆さんの栄養週間」が設けられ、厚生省主導で栄養改善普及運動が始まりました。この運動では、たんぱく質やビタミンなど特に不足している栄養素に特化したキャンペーンが行われ、小麦・肉・ミルクを中心としたアメリカ式の食事が推奨されました。また、輸入食材の食べ方の指導や母子栄養の相談会も行われました。 ララ(LARA): Licensed Agencies for Relief of Asia 公認アジア救済連盟		
	小麦粉の配給・東京 アメリカからの援助物資の小麦粉を計量している。 昭和 21 年(1946)7 月 23 日 米国国立公文書館	
● 食糧難 戦争による農家の働き手不足や空襲被害によって田畑が荒廃していたことに加え、未曾有の天候不順のため大凶作に見舞われ、米の収穫量は前年の 6 割程度しかありませんでした。終戦により朝鮮・台湾及び満州等からの食糧補給が困難となり、海外からの引揚げ・復員による人口増加も食糧不足に拍車をかけました。 昭和 20 年 10 月には当時の大蔵大臣・渋沢敬三が UP 記者に対し、「現状のままだいけば来年度の餓死者・病死者は一千万人になるだろう」と語ったことで、巷では一千万人餓死説が流れる等、食糧事情はひっ迫した状況に追い込まれていました。		
「始つてゐる」死の行進 "餓死はすでに全国の街に" 東京をはじめ、仙台、横浜、名古屋、大阪、福岡等、全国主要都市の飢餓状況を報告している。 昭和 20 年(1945)11 月 18 日付 『朝日新聞』	食糧メーデー 皇居前広場でおこなわれた飯米獲得人民大会(食糧危機突破人民大会とも呼ばれた)には 25 万人が集まった。 昭和 21 年(1941)5 月 19 日 影山光洋撮影	
		一般住民ノ栄養調査 GHQ が日本政府に指令した国民の栄養調査に関する覚書。調査員が各家庭を訪問し、世帯毎の栄養状態や 3 日間の食事内容などを記録することが記されている。 昭和 20 年(1945)12 月 11 日



食品・食料調査
福島県立福島工業学校の冬休みの生物の宿題として課されたもの。毎日の食事内容と、食後の満腹度合いを書くように指示された。「飯トイッテモ少シヤハラカク雑炊ノ時ハドロドロシテ液が沢山アル」と書かれている。
昭和 20 年 12 月 20 日から昭和 21 年 1 月 7 日



「米は足りない! 解決の早道は?」
空き地を利用し、米の代わりにサツマイモやカボチャを作るよう呼びかけている。苗やタネは区役所や小学校で配布、販売すると記されている。
昭和 22～25 年頃(1947～1950)



アメリカ産米の配給・淀橋区戸塚 4 丁目配給所
昭和 21 年(1946)6 月
朝日新聞社提供



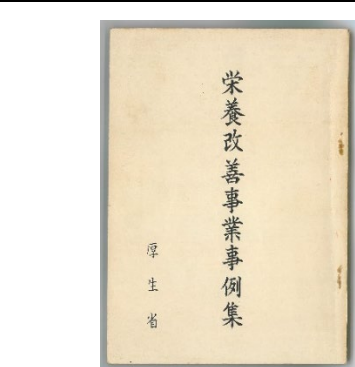
ポスター「皆さんの栄養週間」
輸入された小麦粉や脱脂粉乳などの食糧についての調理指導と、動物性食料品の消費に活動の重点が置かれていた。
昭和 24 年(1949)



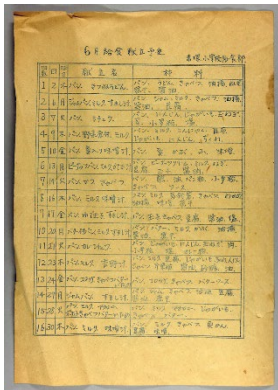
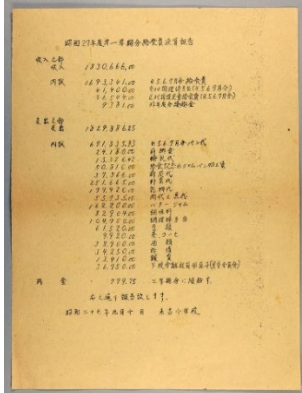
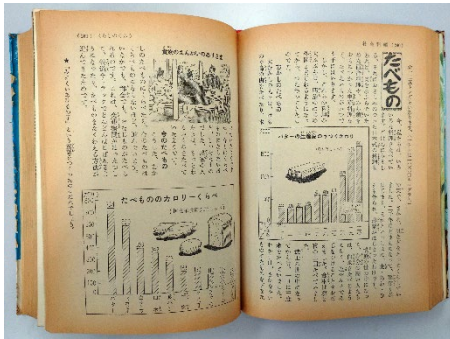
「輸入食糧の調理法」
トウモロコシ粉、生大豆粉、マイロ(米国産コウリヤン)、グリーンピースの調理法が紹介された冊子。トウモロコシ粉はそのままパンにすると固くなるので、熱湯で練ったものを焼いたり、蒸したりして食べることが奨励された。
厚生省編・農林省発行
戦後



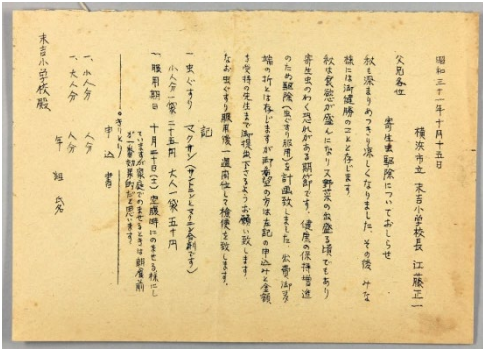
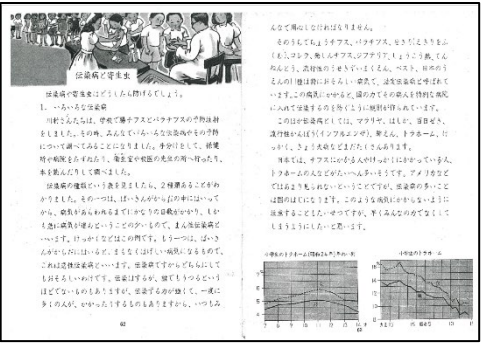
「コーンミールのおいしい食べ方を御存知ですか!」
輸入食糧であるコーンミール(乾燥させたとうもろこしを粉状にしたもの)の調理法を紹介したパンフレット。
昭和 20 年(1945)以降



『栄養改善事業事例集』
各都道府県の栄養改善事業の実践報告をまとめたもの。
厚生省公衆衛生局栄養課発行
昭和 32 年(1957)

(3)子どもたちの健康 食糧不足の影響で、戦後の日本の子どもの体格は戦前を下回る状況に陥りました。子どもたちの栄養状態を改善するため、昭和 21 年(1946)にラウから脱脂粉乳や小麦粉などの救援物資を基にして、東京・神奈川・千葉で試験的に学校給食が導入されました。続く昭和 22 年には全国の都市部で給食が実施され、昭和 29 年には学校給食法の制定により給食制度が法的に整備されました。学校給食は日本の食文化に変化をもたらし、米飯中心だった食卓にパンや牛乳を普及させました。 また、子どもの健康改善のため、戦前から行われていた健康優良児表彰が昭和 24 年に再開されました。世界保健機関が定める「肉体的・精神的・社会的に、すべてが満たされた状態」という健康の定義をもとに児童が選出されました。昭和 26 年には健康優良学校表彰も始まり、地域や学校ぐるみで子どもの健康づくりに取り組むことが推奨されました。	●学校給食の開始 子どもの欠食を補うため戦後開始された学校給食でしたが、当初は主食がなく、おかずとミルクのみが提供されていました。昭和 25 年(1950)にアメリカから小麦粉の援助を受けると、一部都市の小学生を対象に主食を含む完全給食が実施されました。援助食糧の小麦粉で作られたコッペパンと栄養価の高い脱脂粉乳は、学校給食の定番のメニューとなりました。 昭和 26 年(1951)にサンフランシスコ平和条約が調印されると、給食の資金源だったガリオア資金が打ち切れ、給食の継続が難しくなりました。しかし継続を求める強い声から、昭和 27 年に国庫による補助を受けた完全給食が実施されるようになり、昭和 29 年には学校給食が法制化されました。	 ラウ物資のミルクを配るトラック ミルクを配給するラウのトラック。荷台には厚生省の腕章をつけた男性が乗っている。 昭和 22 年(1947)9 月 American Friends Service Committee 提供	
 コッペパン給食・長野県下伊那郡会地村 昭和 28 年(1953) 熊谷元一撮影・熊谷元一写真童画館提供	 6月給食献立予定 板橋区立赤塚小学校での学校給食献立表。主食はパンで、ミルクが汁物がつく献立となっている。 昭和 26 年(1951)	 昭和 27 年度第一学期分給食費決算報告 横浜市立末吉小学校の給食費の決算報告。主食はパンでバターやジャムにも多く支出していることがわかる。 昭和 27 年(1952)9 月	 『四年の学習年鑑 昭和 32 年版』 「たべもの」の学習ページで、バターの生産高の推移が紹介されている。昭和 30 年の生産高は昭和 21 年の 3 倍強で、パン食やバターを使った料理が浸透していく様子がうかがえる。 昭和 32 年(1957)1 月

昭和館特別企画展「丈夫なからだで病を防げ！～健康づくりと感染症予防～」
 ・占領期の健康政策 (3) 子どもたちの健康

			
虫下しを飲む子どもたち・長野県下伊那郡会地村 戦後、衛生状態の悪さから多くの児童が寄生虫に感染していたため、学校では一斉に虫下しを飲む時間が設けられた。寄生虫は集団生活で移りやすいため、「学校病」とも呼ばれた。 昭和 30 年(1955)10 月 熊谷元一撮影	『寄生虫駆除についておしらせ』 児童の寄生虫駆除のため、希望者には「虫ぐすり」(虫下し)を飲ませると呼びかけたもの。当時は畑の肥料に下肥(しもごえ・人の人糞を発酵させたもの)を施していたため、野菜に付着した寄生虫の卵から感染することが多かった。 昭和 31 年(1956)10 月 15 日	『小学生の理科 6 年上校第六学年前期用』 小学校 6 年生の理科の教科書では、「健康なからだ」という項目が設けられ、伝染病や寄生虫について詳しく説明されている。 『小学生の理科 6 年上校第六学年前期用』 昭和 26 年(1951)5 月	ポスター「明治牛乳」 牛乳が分離しないよう、乳脂肪分を均質化する「ホモジナイズ」されたことが記されている。 昭和 28 年(1953)
			
コップ 昭和 27 年(1952)に発売された「森永ホモ牛乳」の景品。商品名は、牛乳が分離しないよう、乳脂肪分を均質化する「ホモジナイズ」加工に由来する。現在の牛乳は、ほとんどこの加工がされている。	ポスター「ビタカルピス」 カルピスにビタミン等を添加したビタカルピスは、戦中はカルピスと共に軍用物資として生産されていた。昭和 24 年 9 月に改めて発売された。 昭和 24 年(1949)9 月発売		

エピローグ

戦中・戦後の健康づくりは、運動や栄養改善を図ることによって、病気や感染症に罹らない強いからだを作ることを目的としていました。たとえ食糧が乏しくても、薬が買えなくても、病気を「予防」することによって回避しようとしますが、国民病とも呼ばれた結核の猛威はすさまじく、戦中における死因順位の第一位となっていました。終戦を迎えた昭和 20 年(1945)は過去最高の死亡率(人口 10 万人に対して 280.3 人)を示したものの、予防接種の義務化、特效薬の普及によって結核の発症率は減少しました。それと併せて、食生活の改善による栄養状態の向上と衛生環境も大きく改善され、生活水準も向上します。

昭和 30 年代後半には食糧難・栄養不足の問題が大きく解消し、さらには昭和 39 年の東京オリンピック開催を契機として、日本人の健康、体力づくりへの機運が高まりました。日本人が体格のハンディを乗り越えて、東京オリンピックで活躍する勇姿は、日本が戦後復興を成し遂げた一つの象徴ともいえるでしょう。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、世界中が感染対策に迫られる昨今ですが、昭和の時代においても感染症の猛威に立ち向かう人々の姿がありました。現代を生きる私たちに多くの示唆を与えてくれるでしょう。

	タイトル	内容	年代
1	東日大毎国際ニュース第 245 号	(ニュースフラッシュ)厚生省誕生 1 月 11 日、木戸新厚生大臣。	昭和 13 年 1 月
2	読売ニュース第 138 号	天覧に輝く体育日本の精華(神宮競技場) 第十回明治神宮国民体育大会の開会式、競技の様子	昭和 14 年 11 月 9 日
3	読売ニュース第 141 号	白米よ！左様なら 陸軍省で“米なしデー”を定めたり、国民精神総動員中央連盟が七分づき米や胚芽米を推奨している。	昭和 14 年 11 月 29 日
4	日本ニュース第 114 号	全土に浚渌 健民運動 今年から全国で赤ちゃんの定期検診を実施。ツベルクリン反応の注射も行われ、健全な少国民を育てる心構えがみなぎっています。健民運動としてさまざまな機会に体操を行うことを推奨。各地で行われている体操の様子。	昭和 17 年 8 月 11 日
5	新日本ニュース第 10 号	伝染病を追放せよ 患者の背中に発しんがあるかどうかを診察する医師。自宅前の道路に並んで防疫班員の散布する DDT 殺虫剤を頭から浴びる少女ら住民。行列して種痘や伝染病予防ワクチンの接種を受ける老若男女の都民。	昭和 21 年 3 月 21 日
6	新日本ニュース第 28 号	栄養失調(東京) 東京では栄養失調、餓餓病に襲われた行倒れ人が毎日数名づつ死んでゆく。厚生省公衆衛生院ではこの栄養失調の正体をつくために七月八日から同院技師熊澤博士が中心に東京世田谷の新生活集団に栄養失調病者の実地調査を行った。	昭和 21 年 7 月 25 日

上映時間 約 12 分